2025年11月　Vol. 34

星川だより

熊谷空襲を忘れない市民の会　会報

平和をつむぐ旅
― 熊谷と伊那を結ぶ記憶の縁 ―

大久保由美子

信濃毎日新聞　2025年（令和7年）9月17日　水曜日

伊那と平和の糸で結ばれたい

旧陸軍伊那飛行場所長の遺族が訪問

1945―2025 戦後

戦時に伊那市上の原に設置された陸軍伊那飛行場の所長を務めた米田主登大尉（1917―45年）の長女の主美さん（80）＝地元東京都在住＝が19日、伊那市を訪れた。飛行場跡地にあった旧陸軍飛行学校伊那分教所として1944（昭和19）年に開設、米田大尉は、同年11月に所長として着任していたとみかっている。この日は同下宿していた場所などを訪れ、生まれる前にたくなった父親をしのんだ。

誕生前に他界した父しのぶ

下宿先は伊那市山寺の福沢家。主登さんは地元では「熊谷空襲を忘れない市民の会」代表を務める、昨年、伊那市美術歴史博物館・民族資料館に寄贈した米田大尉の遺品の写真などを見せ、その中に下宿先の写真があったと話した。長男から、市内で見つけた時の様子を聞いたという。

米田大尉は、妻さんの妻の千歳さん（72）の祖母、よしさんが世話をしたという。

主美さんは、米田大尉が「良くしていただいた」と言っていたと話し、母親が言っていたことを知ったという。

戦後80年を機に「伊那に行ってみたい」と言われているような気がしたと主美さん。「戦争がなかったら、千歳さんによると、祖母の日は、伊那市創造館で開いている飛行場をテーマにした企画展や、飛行場の遺構などを見て回る。上空を旋回していたことは無かったが、伊那の地を離れる前、上空を旋回して行ったと父母から聞いたことがあるという。

主美さんは地元では「熊谷空襲を忘れない市民の会」代表を務める、昨年、伊那市美術歴史博物館・民族資料館に寄贈した米田大尉の遺品の写真などを見せ、その中に下宿先の写真があったと話した。長男から、市内で見つけた時の様子を聞いたという。

主美さんは、米田大尉が「良くしていただいた」と言っていたと話し、母親が言っていたことを知ったという。

戦後80年を機に「伊那に行ってみたい」と言われているような気がしたと主美さん。「戦争がなかったら、千歳さんによると、祖母の日は、伊那市創造館で開いている飛行場をテーマにした企画展や、飛行場の遺構などを見て回る。上空を旋回していたことは無かったが、伊那の地を離れる前、上空を旋回して行ったと父母から聞いたことがあるという。

父親の米田大尉が滞在していた民家を訪れ、孫娘さん夫婦と記念撮影する主美さん（中央）

（信濃毎日新聞に掲載されました）

◆ 伊那との不思議な縁

長野県伊那市は熊谷からおよそ二百キロ、車で三時間半～四時間ほどの距離にあります。

2025年9月16日、熊谷空襲を忘れない市民の会代表・米田主美（かずみ）さんと私は、その伊那を訪れました。米田さんにとっては三度目、私は初めての訪問でした。

米田さんと伊那とのご縁は、米田さんが生まれる五か月前に亡くなったお父上・米田主登（かずと）さんが、熊谷陸軍飛行学校伊那分教所の所長として赴任されていた事で繋がりました。伊那市立高遠町歴史博物館・民族資料館の塚田博之館長が飛行場の調査中に「米田主登」の名を見つけ、新聞で米田主美さんの記事を目にし、「同じ『主』の字を持つ米田さんに関係があるのでは」と思い立って連絡を取ったことが、両者を結ぶきっかけとなりました。まさに“縁”は異な（伊那？）ものです。

◆ 創造館で出会った主登さんの足跡

今回の訪問は、主登さんが下宿していた家が見つかったという知らせを受けてのものでした。伊那で最初に訪れたのは伊那市創造館。そこには報道関係4社をはじめ地元の文化関係者が集まり、私たちを温かく迎えてくださいました。

創造館では伊那飛行場についての展示がされていて、その多くの展示物は写真好きだった米田さんの父主登さんが撮った写真でした。伊那飛行場の写真は当時、外部の人では撮ることが出来なかったため、主登さんが撮った膨大な写真は貴重な資料となっていました。印象的だったのは、中に女性の事務員たちを撮った写真があり、現像して配られたという話もありました。当時は多分貴重であったであろう写真を撮り、それを配るという主登さんの人柄を思わせるエピソードです。

城倉肇さんという御年九十八歳の方が創造館に来てくれていました。その方は伊那飛行場で整備兵をされていました。米田主登さんをお見かけした事があると言い、ただ、「民間の整備兵が大尉殿と話すことはもってのほかで話したことはなかった。」とのこと。米田さんのお父上は大尉殿だったんだ。写真で見る限りお若い方だが、お偉い人だったんだなと、当時の若者と戦争や軍隊の事を思い、胸が痛みました。

◆ 八十年の時を超えて残る家

創造館を後にし、私たちは主登さんの下宿先・福沢家を訪ねました。伊那は伊那谷と呼ばれているくらいで、急な坂道が沢山ありました。大通りから少し逸れると入り組んだ道になり、それを上った所に集落がありました。その中にひときわ立派な日本家屋があり、そこが福沢家です。福沢家の皆さんは私たちを心から歓迎してくださり、伊那の人々の温かさに再度深い感動を覚えました。

その家は主登さんの写真に残っていたそのままの姿をしていました。庭には池があり、蛙の置物が鎮座しているところ、ちゃぶ台、茶器すべてが当時のまま残されているのです。茶器にいたっては奥様がわざわざ出してきてくださいましたが、一つも欠けたところがなく、80有余年大切にされていることが思われました。福沢さんはお母様に聞いた話として、主登さんが伊那を去る時に福沢さんの家の上空を旋回していったという事を教えてくれました。思わず胸が熱くなり、目頭が熱くなりました。主登さんが伊那でいかに大切にされ、主登さんにとってもいい思い出の地だったんだなと想像しました。後日談ですが、福沢家は私たちが訪ねた日がリフォームを開始する予定日だったそうです。それを2日後に伸ばして、私たちを迎えてくれました。一歩遅ければ当時のままの姿を見ることが叶いませんでした。

伊那の人たちとの交流（福沢家において）

◆ 平和の思いを胸に

伊那で過ごした一日は、まるで主登さんが導いてくれたかのような、心あたたまる時間でした。帰り際、ご一緒してくださった方のお一人が「熊谷から四時間？そんなに遠くないですね。またいらしてください。」と、笑顔で言ってくださいました。次に行く機会があれば、高遠の桜が咲くころ、のんびり一泊旅行で訪ねてみたいと思いました。

過去を伝え、平和を願う旅は、これからも静かに続いていくことでしょう。

熊谷空襲戦跡巡りに参加して

自治労連埼玉県本部
特別執行委員　畔上勝彦

自治労連埼玉県本部非正規公共協（自治体に雇用される非正規の公務員及び委託・指定管理下で自治体業務を担う労働者でつくる労働組合です）の行事として、10月26日日曜日の午後、秋雨の中、熊谷空襲戦績巡りを実施しました。

当方の参加者が急に少なくなってしまいましたが、熊谷空襲を忘れない市民の会の方3名で、説明資料も準備していただき、丁寧に解説していただきました。ありがとうございました。

戦災者慰霊の女神像で記念写真

熊谷駅北口で「熊谷空襲を忘れない市民の会」のみなさんと待ち合わせて出発。

昭和20年8月14日（終戦の前日）、それも午後11時30分頃から未明にかけて熊谷市で空襲があったことは聞いていましたが、詳しいことは知りませんでした。

東洋最大と言われた中島飛行機及び理研工業などの関連工場に打撃を与えることとともに、その工場を支える熊谷の町をも攻撃の対象にしたとの説明を受け、当時も戦時国際法があったろうに、戦争となれば市民も巻き込むこともいとわない事実（現代でも同じかも知れませんが）に戦争の恐ろしさを改めて感じました。

市街地の3分の2を焼失、266名もの方が亡くなり、負傷者も約3千人、その数字を聞いただけでも被害の大きさがわかりますが、ゆく先々で、当時の戦跡が私たちに語りかけてくるものは、数字ではなく、時の壁を越えた現実でした。

熊谷女子高等女学校（現熊谷女子高）の正門、そして鈴懸の木、女学生は学業のみならず、報国農園での作業、軍事工場への学徒動員。お国のためと、教え込まれ、疑うことなく日々懸命に務めた女学生たち。

移植された西国民学校で焼け残ったケヤキ。残念ながら見ることはできませんでしたが、石上寺の顔が焼けた弘法大師仏像、戦災ケヤキ、焼けた屋根塀の跡。

焼夷弾が降り注ぎ、炎に巻かれながら、逃げまどう人たち。星川の中で、亡くなった人たち。まさに地獄絵。戦跡の一つひとつから、当時のひどい状況が想像されます。私は直接戦争を経験したわけではありませんが、ガザでのジェノサイドであったり、ロシアのウクライナ侵略など、多くの市民の犠牲が出ている事態に重なって見えます。自らの身に置き換え、近しい人の身に置き換え想像してみれば、戦争がいかに悲惨なものであるか、武力では平和は実現しないことが身に染みてわかるはずなのに…。

厄除け平和地蔵の舌代にあるように、後世の有志が犠牲者を思いやり地蔵を建立されたり、慰霊のために星川の上に建立された戦災没者慰霊之女神像（長崎平和公園の平和記念像の作者である北村西望氏作とは知りませんでした。）を見るにつけ、熊谷市民の方々が戦跡を残し、痛ましい戦災の記憶・記録を残していこうと努力されてきたことにも感動し、地道なとりくみですが、戦争に対抗する確かな道であると思いました。

星川では今年も8月16日に慰霊のための灯篭流しが行われたとのこと、また、中央公園の平和の鐘も、毎年8月6・9・15日に市の職員により鳴らされ、犠牲者の冥福を祈っているとのこと、生活の中に過去の戦争への振り返りの機会が位置付けられていることにも感激しました。

戦跡だけではなく、夏目漱石の坊ちゃんの主人公のモデルである弘中又一が旧制熊谷中学に勤めていたことや、大森貝塚を発見したモースが、石上寺で進化論について講義したこと、中山道が八木橋デパートの中を通っていることなど、範囲の広いご案内をいただき、感謝しています。

熊谷空襲の記憶と記録を後世に伝え続けていけることを願っています。私たちとしても周りのメンバーに伝えながら、ほんの少しですが、力になれればいいと思っています。熊谷空襲を忘れない市民の会の皆様、本当にありがとうございました。ニシダ飴をなめつつ、当時を振り返って。

なぜ、KUMAGAYA

夏のCNN取材を通じて、熊谷空襲に飛び立つ兵士から、なぜ、そんなちっぽけな都市を空爆する必要があるのかと疑問が上がり、上官は熊谷を空爆する意義を必死に説明したと、従軍記者のレポートを聴いた。この秋には、米在住の作家が来熊し交流を持った。彼は、熊谷空襲と南京事件をモチーフにした小説を執筆中で、目的はロケハンだった。特に星川にインスパイアされ、誤解もあったので、南京から帰国した後もやり取りが続いている。送られてきたいくつかの資料を見ると、米軍は熊谷を、軍事的にも地政学的にも要衝の地と捉えていたのは間違いないようだ。実行は単純に順番だったとの認識もあり、なぜ、KUMAGAYAの旅は続く。（吉田）

会計報告
（2025/8/19～2025/11/23）

収　入	48,559円
支　出	35,940円
残　高	83,314円

編集委員　吉田庄一、小川美穂子、米田主美
連絡先　吉田庄一（090-4957-9181）
メール　imajn241@gmail.com
HP http://www.peace-kumagaya.org